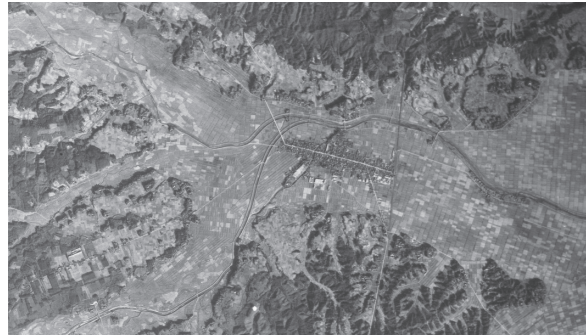


近い未来へ まちなかの これからのあり方

ここまでまちなかがどのような場所であるかを過去から現在まで辿ってきました。ここではこれからのまちなかのあり方、果たす役割を7つの柱（p.3参照）に沿って整理します。



在と小高のまちなかの関係の深さは多様でした。在がまちなかを支え、まちなかが在を支えていた時代もありました。個々の住まいの修復、在の再建とともに、避難指示解除後の拠点として、まちなかの役割が重要です。

まちなかが再生拠点
小高区の支柱となる

ボランティアや若者など、小高との繋がりを維持しましょう。これまで、あまりまちなかでは活動していなかった人や高校生にもまちなかに居場所をつくりましょう。帰還のタイミングも人それぞれです。数年後に戻る人も、数十年先の人も、それまでに小高に立ち寄れる場所、小高に帰ってきたと思える風景をつくりましょう。空間づくりだけでなく、コミュニティづくり、情報発信なども一緒に考えましょう。一人暮らしのお年寄りが増えることにも対応が必要です。

人と小高の、
いろいろな繋がりをもち



活動が芽生える

小高の各所で事業再開や新たな展開が始まっていますが、その支援や協働にまちなかの中心性が寄与できるでしょう。高校がまちなかにあることも活きるかもしれません。二つの実践が、新たな展開を生み出すかもしれません。実践者の発表と意見交換の場をもちましょう。

資金確保の
ノウハウの共有
ニーズとシーズの
マッチング

新たな生業への
挑戦を支える

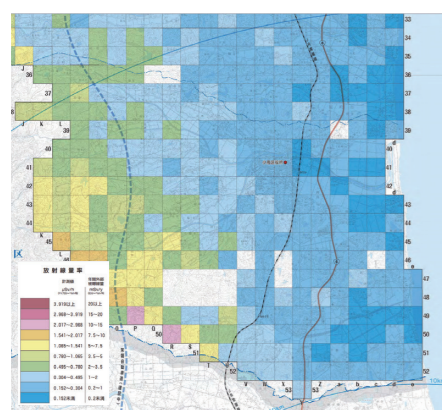
様々な関心が集まっている今は、挑戦に良い時です。専門的なアドバイスや最初の投資なども得られやすい時期です。皆で応援しましょう。巡回型の小売業や福祉サービス、エネルギー産業など現在の小高の状況に対応することがヒントになるかもしれません。

まちなかに期待される役割



多様な在を支える

小高は多様な在の集合体ですが、個々の在が被災前のような安定に戻ることは困難です。在の中でまかなってきた機能の一部を、まちなかが担う方が良いかも知れません。例えば伝統芸能の継承や集会の場、交通手段の確保などです。

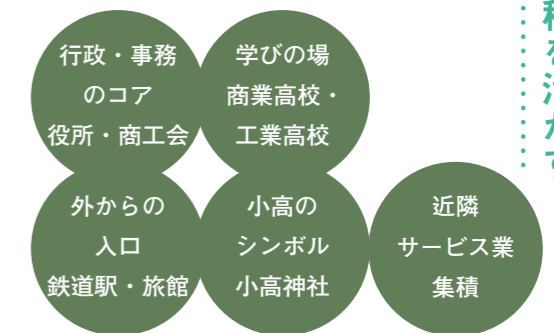


南相馬市放射線量率マップ（2014年4月版）より

まちなかだけでなく、小高全体が放射線リスクの把握と対処のための場が必要です。降雨後のモニタリングなど、私たちの手でできる方法もあるかも知れません。

放射線リスクに
向き合う

変わらぬまちなかの役割



これまでの
蓄積を活かす

除染や建替などの空間的改変や危機への対処として、これまで築かれてきたソフトとハード両面の蓄積を活かしましょう。

なにを受け継ぎ残すのか議論が必要です。蔵は立派な防火建築ですし、楨垣は火に強く水害にも役立ちます。堤や水路も先人からの遺産です。

まちなかの
プランの
方針
→p.12-13

1 まちなか全体も敷地も複合的に使う

2 人と人をつなげるものを大事にする

3 激変状態を柔軟に受容し、「戻る・戻らない」以外の選択肢を用意する